



厚沢部町

「保育園留学」を通じた地域活性化・長期的な関係人口創出の取組

厚沢部町は北海道南西部に位置し、農林業を基幹産業とする小さな過疎のまちです。町では20年前に比べて約70%まで人口が減少し、過疎化が悩みでしたが、現実を受け止め過疎の良さを活かしプラスに変える『世界一素敵な過疎のまち』を目指し取組を進めています。今回は、関係人口創出を目的として始めた『保育園留学』について紹介します。



保育園留学誕生まで

厚沢部町では、全道のなかでも早い段階から、町が100%出資する『素敵な過疎づくり株式会社』を設立し『移住体験住宅』を活用した移住施策などを行い、人口増に向けて外部からの人を受け入れる体制を整備してきました。

また、あわせて子育て支援にも力を注ぎ、山々に囲まれた町の特色を活かし、大自然の中で子どもがのびのびと生活できる認定こども園『はぜる』を設立しました。『はぜる』は移住者や地域住民が集う多世代交流ができる子育て支援拠点施設としてつくられており、町外の人でも短期間子どもを預けることが可能な「一時預かり」の制度を設けていました。

そうしたなか、移住体験を希望する道外企業の方からこども園への託児依頼があったことにヒントを得て、町ではこの『はぜる』に既存の移住関連施設や農業体験などのこれまでの施策を有機的に融合、連携させ、新たな子育て世代の関係人口を創出するために『保育園留学』というひとつのパッケージとした取り組みを開始しました。



保育園留学とは

保育園留学とは、一時預かり制度を利用して全国から町の認定こども園『はぜる』に留学したい子育て世帯を受け入れ、家族で1〜3週間ほど町内に滞在していただくものです。町の豊かな食、大自然のなかで、のびのびとお子さんを育て、食体験や収穫体験を経験することで、都市部では味わうことのできない広大な土地の恵みや地域のつながりを感じられる体験をしていただき、『保育園留学』を通して、域外に開けた関わり方をしていくことで長期的な関係人口を築き上げていきます。

保育園留学、はじめました。

北海道檜山郡厚沢部町 認定こども園 はぜる



© Ikuya Sasaki



▲『はぜる』の周辺は自然に囲まれている。

保育園留学の一週間

保育園留学の期間中は、家族で町内の移住体験住宅に滞在し、子どもを認定こども園に預けている間、親は移住体験住宅や移住交流センターでテレワークをすることが出来ます。また、子どもの様子は、子育てサービスアプリ「キッズリー」で確認出来ます。

週末は家族でメークイン、アスパラ、ブルーベリーなどの収穫体験ができる他、郷土料理教室、そば打ち体験、またたけ工場の見学なども可能です。

「いとも園はげる」

『はげる』は、自然あふれる木々に囲まれた広大な敷地にあり、園庭はこの地にあつた公園の芝生や築山をそのまま活用しているため、子どもたちは大自然の中でのびのびと思い切り遊ぶことができます。



▲地元の木材をふんだんに使用し木のぬくもりを感じられる園舎



▲3歳未満児用の園庭
(子どもの年齢に合わせた環境設定)

移住体験住宅は2018年建築▶
子ども用チェアも用意



▲幅広いニーズに対応可能な
2~3LDKの移住体験住宅が3棟4戸



また、園内の遊戯室は天井が吹き抜け、地元木材で作製した遊具『でん』やブリッジキャッスル、ボルタリング、絵本のまちあいホールなど、子どもにとってドキドキとワクワクに溢れています。

「移住体験住宅・テレワーク施設」

『移住体験住宅』はこども園から車で5分のところにあり、生活用品が一通り揃っているだけでなくWiFiも完備され、住宅でのテレワークが可能となっています。また、住宅の隣には移住交流センターがあり、こちらにもWiFiが完備されていることからテレワークが可能となっています。

取組の成果・効果

既に保育園留学された方からは「また厚沢部に行きたい」と声があり、受け入れたこども園側でも、地元の園児たちが保育園留学の子からたくさん刺激をもらい相乗効果があると話しています。4月以降の申込も1カ月で100件を超えており、新たな関係人口創出につながっています。

また、「こども園」と「移住体験住宅」という地域の既存資産を活用し連動させ『保育園留学』という新たなパッケージを生み出したことが、地域活性化並びに雇用創出にも繋がると評価され、内閣府が運営する「地方創生SDGs官民連携プラットフォーム」の2021年優良事例として選出されました。

今後の取組の方向性

この『保育園留学』は厚沢部町に限らず過疎が進む自治体にとって、地域課題解決に寄与する事業となることから、自治体同士が連携し、ポータルサイトを共同により運営することで、募集・PRの効率化を図ることも可能です。

また、法人向けの『保育園留学福利厚生プラン』の提供を開始し、既に入を決めた企業もあることから、多様化する『働き方』と『子育て』における新たな取組の一つとして『保育園留学』を推進していきます。

体験者の声



令和3年7月と12月に
それぞれ3週間保育園
留学を体験した
山本雅也さん家族

娘が2歳になり、言葉も興味の対象も一気に増えてこんなご時世だけでもっと色んな経験をさせてあげたい、もっと色んな景色を見せてあげたいと思い、保育園留学をすることに決めました。

初日の朝こそ、娘はこども園に預けた直後泣いてしまつて心配しましたが、こども園で導入しているキッズリーの連絡帳で楽しそうに過ごしている娘の様子を見ることができて安心しました。施設の素晴らしさはもちろん、保育士の先生方がすごく気にかけてくれて本当にありがたかったです。夫婦ともにリモートワークの不安はありましたが、移住体験住宅と移住交流センターに分かれWiFiの問題もなく、娘が楽しんでくれている親としての充実感も相まって、仕事の生産性が上がった気がします。

保育園留学をきっかけに家族ぐるみで厚沢部町の暮らしに入らせてもらい、食育のような、旅行のような、ワークショップのような、そのすべてが組み合わさったさらに豊かな体験でした。

『なおみちカフェ』から

～地域創生のヒントを探る～



なおみちカフェ

鈴木知事が、北海道創生に向けて、様々な分野で活躍されている方をお訪ねし、その取組や地域への思いなどをお聞きしています。同行した職員から皆様にもその様子をお伝えします。

令和3年11月9日訪問

当麻町「サウナバス」・役場庁舎編

今回紹介するのは、官民協働の「サウナバス」の取組や、町産木材の地産地消を進めている当麻町です。

はじめに知事がお話を伺ったのは、「made in 当麻町」との「町」サウナプロジェクトです。このプロジェクトは、町の豊富な自然を活かし、サウナを核とする地域活性化を目指すもので、町内の企業・団体とともに協働で取り組んでいます。

最初に進めた取組がこのプロジェクトの核となる、移動式の「サウナバス」の開発です。

車両は地元企業のトウマ電子工業（株）が自己負担でマイクロバスを改造して製作し、内装には当麻町森林組合が提供した町産のトドマツを使用しています。車内では、サウナストーンに水をかけて蒸気を発生させる本場フィンランドの入浴方法「ロウリュ」が楽しめます。

サウナファンをはじめとする全国の方々にご利用いただけるようサウナバスは、愛好家の間で使われるサウナ用語「とこのう」から「当麻町とこのえバス」と名付けています。

て、ふるさと納税の返礼品としてレンタルチケットの取扱いも開始しています。

次に、平成30年に完成した役場庁舎のお話を伺いました。町産木材の「地産地消」を普及推進するため、庁舎は、構造材や造作家具、仕上材に至るまで100%町産木材を使用しており、地元大工の技術を活かして建築されました。

木の温もりあふれる執務室は、ワンフロアとすることで、住民が一つの窓口で手続きを済ますことができるワンストップサービスが可能となったほか、部門間の連携促進も図られています。

新技術によるカラマツ無垢材の構造材利用や、一般流通材による大空間の実現などが評価され、令和元年には「グッドデザイン賞」「赤れんが建築賞」をそれぞれ受賞しました。さらに、暖房には町産チップを燃料とした木質バイオマスボイラーを採用し、環境へも配慮しています。

町は今後とも、サウナバスによる交流人口の拡大や、町産木材の「地産地消」を推進することとしています。

当日の知事の言葉から

サウナバスはまさに官民力が合わせて取り組んでいる事業であり全国的にも注目度の高いもの。私も服を着たままでしたがサウナを体験させていただきました。また、役場庁舎では、町産木材の地産地消を推進しており、ゼロカーボン北海道の実現にも寄与するものと感じました。こうした取組により、地域がより一層活発化していくことを期待しています。



▲サウナプロジェクトとして取り組んだサウナバス



なおみちカフェ（当麻町編）の動画はこちらからご覧いただけます。（YouTubeチャンネル）



令和3年12月17日訪問

厚浜木材加工協同組合編

次に紹介するのは、釧路管内の地域木材の利用促進に取り組み、中町の厚浜木材加工協同組合です。10企業のグループから成る同組合は、戦後植えられたカラマツ間伐材の有効利用を目的として昭和58年に設立されました。

慶伊勝司理事長、鈴木一浩理事に貯木場や製材工場などをご案内いただき、お話を伺いました。複数企業を1か所に集約した木材コンビナートでは、原木集荷から製材、製品、設計、加工、施工までの一貫体制を構築することで、コスト縮減と高付加価値が図られています。

同組合では、釧路管内で成熟期を迎えているカラマツ・トドマツを加工し、主要構造部にカラマツ大断面集成材を用いることで大型化と多様性を実現し、通常木造では建築が難しい中大規模建築の木造化を推進しており、道内外において公共施設や学校、教育施設など幅広く利用されています。

また、管内で酪農業が盛んであることや、昨今の低炭素化やSDGsの動きに着目して、特に畜舎や農業関連施設の木造化の普及促

進に力を入れていきます。大断面集成材を活用した木造の畜舎は、他の工法に比べてCO2排出が大幅に抑えられるほか、酪農家からは畜舎内の環境が良くなることで乳量・乳質等の改善に寄与しているとの声もあるそうです。

また、木材の「地産地消」を掲げる同組合では、建築される施設の木材にその地域の木材を使用する取組も進め実績を積んでいます。視察した木材コンビナート内の研修センター「森の学舎」も地域木材が利用されており、施設内には若い林業従事者が安心して共働きできるような託児施設が併設されているなど、多様で安心な労働環境の整備についても取り組まれています。



当日の知事の言葉から

道産木材の利用を広げていくことは、地域資源の有効活用や、ゼロカーボン北海道の実現に向けて重要な取組です。

道としても、引き続き、道産木材製品のブランド「HOKK AIDO WOOD」のブランド力の強化に取り組んでまいりますので、今後とも道産木材のPRにご協力をお願いします。



なおみちカフェ（浜中町編）の動画はこちらからご覧いただけます。
(YouTubeチャンネル)